

学生スポーツ選手の愛校心形成過程について

The Development of School Loyalty in College athletes

スポーツ文化研究領域

5010A086-1 三村 有紀恵 研究指導教授：トンプソン リー A. 教授

第1章 序論

1. 研究背景

現在、日本では数多くのスポーツ大会が放送されている。これはプロスポーツに限ったことではなく、学生のスポーツ大会も大きな注目を集め、地上波放送において多くの試合が生中継されている。高校野球、大学野球、高校サッカー、箱根駅伝、大学ラグビーなど、枚挙に暇がない。スポーツ中継の時間の増加とともに、中継されるスポーツも増えている(宮崎, 1990, pp. 28-30)。

中継では、試合中の選手の姿以外にも必ずといっていいほど、試合中の学校を応援している観客の様子が映される。彼らは「愛校心」を持っており、自分が神聖なイメージを持っている出身学校の価値を、試合に勝つことでより高めてほしいという思いがあるから、面識のない現役選手を応援しているのではないだろうか。おそらく卒業生たちは、出身学校の選手たちが勝つ姿を見て、「自分の出身学校は強く、優れているのだ」と愛校心を高めていると思われる。

スポーツ観戦者の応援しているチームに対する愛着に関する研究は高橋ら(2005)、松岡ら(2007)など数多く見られるが、これらほぼすべての研究において調査対象者は一般人である。そのため、実際にプレーをしている選手が所属チームに対して愛着を持っているかということに関する研究はこれまでにほとんど見られない。

では、実際にプレーをしている学生スポーツ選手たちの愛校心はどのように形成されていくのだろうか。

2. 「愛校心」の定義

先行研究を調査してみたが、「愛校心」という言葉が定義されているものがなかった。そこで自分の所属している集団への愛という点で共通な部分をもつとして、「愛国心」の定義について調査した。

愛国心に関する定義については「過去幾多の論者がそのことに取り組んできたが、彼らの結論としての定義は、論者の数だけある、という状態」(小川, 2008)である。

中村(2006)、佐藤(2007)の愛国心に対する定義を参考にし、本研究では「愛校心とは、自分が所属している学校を愛する心。またそれに対する愛着心」と定義することとした。

3. 研究の目的

本研究では、学生スポーツ選手の愛校心形成に影響を与えている要因を明らかにすることを目的としている。また、そこから出た結果をデュルケム(1941)らの宗教構造に関する先行研究と比較し、部活動の構造について検討する。

第2章 先行研究

愛校心に関する研究は見られなかったので、愛国心に関する先行研究を調査した。

アンダーソン(2007)は、「国歌を歌う」という行為が愛国心を高める要素として挙げていた。

デュルケム(1941)は宗教現象とは信念と儀礼から成り立っているとし、コリンズ(1992)はデュルケムの研究を受けて「いかなる種類の社会集団も儀礼と象徴なくしては成立しえない。つまり、すべての社会集団には儀礼と象徴が存在する」との見解を示していた。

早稲田大学ラグビー蹴球部で監督経験を持つ清宮(2004)は、「赤黒ユニフォーム」と「荒ぶる」という部特有のものがあるおかげで選手はモチベーションを維持していると述べていた。

第3章 仮説

先行研究より、学生スポーツ選手の愛校心が形成される際に影響を与えている要因は以下の3点だと考えた。

- ①校歌
- ②ユニフォーム
- ③部特有のものや行事

第4章 調査方法

W大学ラグビー部員4名、W大学陸上部員5名（うち1名はOB）にインタビュー調査を実施した。

調査期間は2011年9月～11月にかけて実施し、インタビュー時間は計30分～1時間15分程度、それぞれ1対1の個別インタビューを行った。その際、対象者の了承を得た上で、インタビュー内容をICレコーダーに録音した。その後インタビュー内容をすべて書き起こし、内容分析を行った。

第5章 結果・考察

インタビューを行った結果、以下の3項目が愛校心形成へ影響を与えていると考えられる。

- ① 校歌
- ② ユニフォーム
- ③ 部特有の事物（【陸上部】(a)一本締め【ラグビー部】(b)第一ユニフォーム（柄）、(c)第二部歌）

今回の結果から、直接愛校心形成に影響を与えるもの（①、②、③-(c)一本締め）と、愛部心（所属する部に対する愛）を通して愛校心形成に影響を与えているもの（③-(a)第一ユニフォーム、(b)第二部歌）があることが明らかになった。

以上のことから、部活動に参加している学生たちは愛部心を通して形成される愛校心も持っているため、愛校心を強く持っている人が多い可能性が考えられる。

・宗教的観点に基づく考察

先行研究（デュルケム、1945）から、すべての宗教現象は信念と儀礼から成り立っているということが明らかになっていた。そこで、今回明らかになっ

た結果を元に、大学の部活動における宗教現象について考察するため、部員たちの信念や儀礼について整理した。

その結果、ユニフォームと第二部歌という聖物は、信念を象徴しているものだと考えられる。また部員たちは部が定めた道徳や聖物に対する儀礼を守ることと、部への忠誠を示していると考えられる。よって、宗教的な観点から部活動のまとまり方を見ることが出来るであろう。しかし、「聖なるもの」として対象が宗教と部活動では異なるため、部活動は宗教とは言えない。だが聖物、つまりその集団の信念を具体的なものに落とし込んだものを中心にまとまっているという点においては、宗教も部活動も同じ構造を取っていると考えられるので、世の中の集団はすべて同じ構造を取っているといえるであろう。

第6章 結論・今後の課題

本研究では、学生スポーツ選手の愛校心形成についての一考察を示すことが出来たと思われる。

本研究は、学生の中でも部活動に所属してスポーツをしている人、というかなり限られた範囲の人を対象にしていた。そのため、部活動やサークル活動などに所属していない学生の愛校心形成に対して同様のことが言えるかどうかという点では疑問が残る。今後は、一般学生を対象を広げて調査する必要がある。

今回は部活動に焦点を当てて調査したが、今後は他の集団についても同じようなまとまり方をしているかどうか明らかにする必要があると思われる。

主要参考文献

- ランドル・コリンズ『脱常識の社会学：社会の読み方入門』井上俊，磯部卓三訳．岩波書店，1992
- ベネディクト・アンダーソン『定本想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石隆，白石さや訳．書籍工房早山，2007
- デュルケム『宗教生活の原初形態』古野清人訳．岩波文庫，1975